

『省察』の《反論と答弁》における 幾何学図形を巡る議論

倉 田 隆

デカルトはその主著『省察』において、幾何学図形、とりわけ三角形にしばしば言及している。しかしその幾何学図形の存在について、『省察』本文および《反論と答弁》を公刊した頃のデカルトがどのように考えていたのかは、必ずしも明確ではない。幾何学図形は存在するのかもしれないのか、また、存在するとすればどのような意味で存在するのか。

『省察』本文を読む限りでは、まず第一に、私の思惟<cogitatio>のうちに存在する、という可能性がある。《第五省察》において、「私が三角形を想像する<imaginari>場合、おそらくはそのような図形は、私の思惟の外では<extra cogitationem meam>、世界のどこにも実在する<existere>ことはないだろうし、かつて実在したこともないであろう」(A.T.VII, 64.12-14)と述べられているからである。

第二に、神のうちに在る<esse>、という可能性がある。デカルトによれば、「明晰に<clare>私が知得する<percipere>ところのすべてのものが、……形相的に<formaliter>かあるいは優勝的に<eminenter>か¹⁾、神のうちに在る」(A.T.VII, 46.24-27)のであって、しかも「純粋数学の対象<purae Matheseos objectum>を私は明晰かつ判明に<distincte>知得する」(A.T.VII, 71.16)のである。幾何学図形が「純粋数学の対象」であるならば、幾何学図形は、形相的にあるいは優勝的に、神のうちに在る、ということにならないだろうか。

さらに第三に、「純粋数学の対象において把握される<comprehendi>ところの、一般的に観られたすべてのもの<omnia generaliter spectata>が、物的事物<res corporea>のうちに在る」(A.T.VII, 80.08-10)という、《第六省察》におけるデカルトの言明からすれば、幾何学図形は物的事物のうちに在る、とも言えそうである²⁾。

いずれにせよ、幾何学図形のいわば存在論的身分を、『省察』本文のみから明確にするのは、非常に困難である。というのも、『省察』本文において、その存在に関して主題的に論じられているのは、思惟する事物<res cogitans>と

しての私の存在、神の存在、そして物体的事物の存在であって、幾何学図形に言及するのは、これらの存在を論ずる上で必要な限りでのことだからである。

しかしながら、『省察』本文においてデカルトが幾何学図形に言及している箇所、とりわけ《第五省察》における三角形に関する論述に対して、いくつか興味深い反論が寄せられている。これらの反論、そしてそれに対する答弁を検討することは、幾何学図形の存在論的身分に関するデカルトの見解を明確にする上で、欠くことのできない作業である。この作業のための第一歩として、これらの反論とそれに対応する『省察』本文の箇所、そして反論に対するデカルトの答弁、この三つを対比させながら丁寧に読み解いていきたい。これが本稿の目的である。

この作業を進めていく上で留意したいのは、デカルトあるいは反論者が幾何学図形に言及する場面において問題となっているのが、数学的に定義された図形そのものなのか、あるいは、その図形の観念<idea>なのか、あるいはまた、その図形の本質<essentia>ないし本性<natura>に属する特性<proprietas>なのかを、できるだけ厳密に区別する、ということである。そうすることによって、デカルトと反論者との対立を際立たせることができるであろうし、反論と答弁がすれ違っているように見える箇所についても、ある程度の整理ができるように思われるからである。

本稿において検討するのは、《第五省察》の第5段落、第6段落、第8段落、《第六省察》の第1段落、第3段落、第9段落、以上六つの箇所に関する反論と答弁である。

1 第五省察第5段落に関して

M1 《省察本文》 A.T.VII, 64.06-24

ここでとりわけ考察しなければならないと私が考えるのは、私の外にはおそらくどこにも実在しないであろうが、しかしそれでも、無<nihil>であるとは言われることのできない或る事物<res>、こういう事物の無数の観念を、私は私のうちに見出す、ということ、そしてそういう事物は、私によって或る意味では随意に思惟され<cogitari>はするが、しかし私によって作り出される<finiri>のではなくて、固有の真実で不変な<verus & immutabilis>本性をもっている、ということである。例えば、私が三角形を想像する場合、おそ

らくはそのような図形は、私の思惟の外では、世界のどこにも実在することはないだろうし、かつて実在したこともないであろうが、そうだとすると、[この図形には] 不変にして永遠な<immutabilis & aeternus>、或る一定の本性、あるいは本質、あるいは形相<forma>が在るのであって、これは、私によって作りなされ<effingi>たものではなく、私の精神<mens>に依拠する<dependere>ものでもない。このことは、その三角形についてさまざまな特性が、すなわち、その三つの角の和が二直角に等しいこと、その最大の角には最大の辺が対すること、およびこれに類することが、論証され<demonstrari>うということから明らかである。私が三角形を想像したとき、以前はこれらの特性について決して思惟したことはなかったとしても、いまはそれらを私が欲すると欲しないとにかかわらず、私は明晰に認知する<agnoscere>のであり、したがってまた、それらは私によって作りなされたものではなかったのである。([]内はMMFからの補足)

ここでは、三本の直線で囲まれた平面図形としての三角形と、三角形の本質ないし本性とが、はっきり区別されている。「私が想像する」のは、三角形という図形そのものである。そしてまた、「私の思惟の外では、世界のどこにも実在することはないだろうし、かつて実在したこともないであろう」ものは、三本の直線で囲まれた平面図形としての三角形である。また、このような三角形は「私の思惟の外」には実在しないとデカルトは述べているが、私の思惟のうちに実在するとは言っていない、ということにも注意すべきだろう。

これに対して、「私が明晰に認知する」のは、三角形の特性であり、これは三角形の本質に属する。三角形の本質は「不変にして永遠」であり、「私の精神」とは独立に、三角形に在るものである。

O1-1 《第三反論 XIV》 A.T.VII, 193.10-194.05

もし三角形が世界のどこにも実在しないとすれば、いかにして三角形が何らかの本性を有するのかわ、私は知解し<intelligere>ない。というのは、どこにも在らぬ<>nullibi est>ものは、在らぬ<non est>なのであって、したがってまた、である<esse>ことを、言い換えれば、何らかの本性を、有しないからである³⁾。精神のうちなる三角形は、見られた三角形に、あるいは見られたものから作り出された<factus>三角形に起因する<oriri>。ところが、(三角形の観念がそこから起因するとわれわれが考えるところの) その事物を、三

角形という名辞<nomen>で一度われわれが呼んでしまうと、その三角形自体は消滅するものではあるが、その名辞は存続する<manere>。それと同様に、もしわれわれが思惟によって、三角形の角の総和が二直角に等しい、ということ一度概念し<concipere>、そして、「二直角に等しい三つの角を有している」というもう一つの名辞を三角形に与えてしまえば、いかなる三角形も世界に実在しないとしても、その名辞は存続するだろう。そして、「三角形は二直角に等しい三つの角を有するものである」という命題の真理は、永続的<sempiternus>になるだろう。しかし、もしかしてすべての三角形が消滅するようなことがあれば、三角形の本性は永続的とはならないだろう。

同様に、「人間は動物である」という命題も、その永遠の名辞のゆえに、永遠に真となるだろう。しかし、人類が消滅すれば、もはや人間の本性は存在しないだろう。

それゆえ本質は、それが実在<existentia>から区別される限り、「である」という語による名辞の連結<copulatio>以外のなにものでもない、ということも明らかである。したがってまた、実在を欠いた本質というのは、われわれの[精神の]捏造<commentum>なのである。そして、心<animus>のうちの人間の像が人間に属するように、本質は実在に属するように思われる。([]内はMMFからの補足)

R1-1 《第三答弁 XIV》 A.T.VII, 194.12-15

本質と実在との区別はすべての人に識られ<nosci>ている。またここで、永遠の真理の概念<conceptus>ないし観念のかわりに、永遠の名辞について述べられていることは、すでに十分に斥けられている。

第三反論者(ホップズ)にとって、「精神のうちなる三角形」とは明らかに、三本の直線で囲まれた平面図形として思い描かれた像<imago>であって、『省察』本文の言葉を用いれば、「想像された」三角形である。そして、これが反論者にとっての「三角形の観念」である。また、「見られた三角形」とは、三角の形状<figura triangularis>をもつ⁴⁾物的な事物であり、これが「三角形の観念」の原因である、ということになる。それゆえ、三角形の本質ないし本性について言えば、われわれが、「三角形の観念」すなわち「三角形の像」を介して、「二直角に等しい三つの角を有している」という特性を把握したとしても、その特性は、三角形の永遠不変な本質に属するのではなく、「三角形の像」の

原因である「見られた三角形」から引き出されたもの、ということになるだろう。それは、「心のうちの人間の像が人間に属するように、本質は実在に属する」という反論者の言葉からも明らかであろう。

この反論に対してデカルトは、本質と実在とを区別するという以外には、この箇所の答弁ではほとんど何も答えていない。しかし、《第二答弁》に附された《神の実在と靈魂<anima>の身体<corpus>からの区別とを証明する、幾何学的な様式で配列された諸根拠》の定義IIにおいて、「ただ表象<phantasia>⁵⁾のうちに描かれた像のみを、私は観念と呼んではない。それどころか、それらが身体的な表象において在る、言い換えれば、脳の或る部分に描かれている、という限りでは、そのようなものをここではいかなる意味でも観念とは呼ばない」(A.T.VII, 160.19-161.03)と述べていることから明らかのように、デカルトは、観念に関する第三反論者の見解を認めない。

O 1-2 《第五反論》 A.T.VII, 319.09-11

至高の神のほかに、さらに「不変にして永遠なる何か或る本性」を設定する<statuere>ことは、粗野なくdurus>ことであるように思われる。

R 1-2 《第五答弁》 A.T.VII, 380.01-12

あなたが、「不変にして永遠なる何か或るものを立てることは、粗野なことであるように思われる」と言っていることは、実在する事物が問題になっているとしたならば、あるいは単に、その不変性が神に依存し<pendere>ないような、そういう不変的な事物を私が設定したとしたならば、もっともであると思われる。しかし、……私は、事物の本質、ならびにそれら事物について認識され<cognosci>うる数学的真理が、神から独立であるとは考えない。しかし私は、それにもかかわらず、神がそのように欲したがゆえに、神がそのように按配した<disponere>がゆえに、それらは不変であり永遠である、と考える。

第五反論者（ガッサンディ）は、三角形の本質が「不変にして永遠」であるというデカルトの主張に、異議を唱えているようにも見えるが、真意ははっきりしない。

これに対する答弁においてデカルトは、三角形の本質は「神がそのように按配した」と述べているが、この言葉は明らかに「永遠真理創造説」を示唆して

いる。三角形の本質の原因は神である、とデカルトは主張しているのである。この説への言及は、神の非決定<indifferentia>の問題を取りあげた《第六反論》(A.T.VII, 416.24-417.12) に対する次の答弁 (R 1-2-1) においても見出される。

また、R 1-2 そのものに対しては、以下のような反論 (O 1-3) と答弁 (R 1-3) がある。

R 1-2-1 《第六答弁》 A.T.VII, 432.09-18

例えば、神が世界を時間のうちに創造することを欲したのは、そういうふうになっている方が、永遠の昔から創造していたとした場合よりも、いっそう善いと神が見てとったからというのではないし、また、三角形の三つの角が二直角に等しいということを神が欲したのは、別様にはなりえないと神が認識したからでもない。そうではなくて反対に、神が世界を時間のうちに創造することを欲したから、それだから、そういうふうになっている方が、永遠の昔から創造されていたとした場合よりも、いっそう善いのであり、三角形の三つの角が必然的に二直角に等しいということを神が欲したから、それゆえに、今やそのことが真なのであり、別様にはなりえないのである。

O 1-3 《第六反論》 A.T.VII, 417.27-418.09

幾何学や形而上学の諸真理は、あなたによって述べられているように、不変で永遠ではあるが、しかし神から独立してはいない、というようなことがいったいなぜ起こりうるのか。すなわち、いかなる類の原因によって、それら諸真理は神に依拠しているのか。それゆえまた、神は、三角形の本性などには在りはしなかった、というふうにすることができたのか。また、どうか教えていただきたいが、どうやって<qua ratione>神は、永遠の昔から、四の二倍が八であることが真でなく、あるいは、三角形が三つの角をもたない、というようにすることなどできたのだろうか。要するに、それらの真理は、知性<intellectus>がこれらのことを思惟しているかぎりでは知性に依存するか、あるいは、実在する事物に依存するか、あるいは、独立的なのである。神が、それらの本質ないし真理<essentiae seu veritates>は永遠の昔から在りはしなかった、というふうに作りなすことができたとは、思われぬからである。

R 1-3 《第六答弁》 A.T.VII, 436.03-436.25

数学や形而上学の真理が、いったいいかなる類の原因において神に依拠して

いるのか、と問う必要はない。というのも、原因の類というのは、この「神が原因となるという場合の」ような原因のあり方<haec causandi ratio>におそらく注意していなかった人々によって枚挙されたものなのだから、そういう人たちが、このような原因のあり方に名前をあてがっていないとしても、少しも驚くべきではないからである。……また、「どうやって神は、永遠の昔から、四の二倍が八であること等々が真でない、というようにすることなどできたのだろうか」と問う必要もない。というのは、それはわれわれによっては知解されえないということを、私は認める<fateri>からだ。しかしながら他方で、いかなる類の存在<ens>のうちにも、神に依存しないようなものは何も在りえないということを、私は正しく知解しているし、また、或るものを次のように制定する<instituire>こと、すなわち、それらが現にある状態<se habere>とは別の状態でありうるということが、われわれによっては知解されないように、そのように或るものを制定することは、神にとって容易であったということも、私は正しく知解しているので、われわれが知解してもしないし、われわれによって知解されなければならないと気づいて<advertere>もいない、そんなものために、われわれが正しく知解しているものについて疑うのは、理に悖ることになるだろう。したがってまた、「永遠の真理は、知性に依存するか、あるいは、実在する事物に依存する」と考えるべきではなく、それらの真理を永遠の昔から、この上ない立法者として制定した神のみに依存する、と考えるべきである。([]内は筆者による挿入)

三角形の本質は、知性に依存するか、実在する事物に依存するか、あるいは何もものにも依存しない、と主張する第六反論者（メルセンヌ他）に対して、デカルトはこれをはっきりと否定している。三角形の本質は「神にのみ依存する」のである。また、三角形の本質の原因が神であるとするならば、それはどのような類の原因なのかと問う反論者に対して、そのような問は無駄である、われわれには知解できないのだから、とデカルトは問そのものを拒否している。

O 1-4-1 《第五反論》A.T.VII, 320.31-321.11

三角形とは、或るものが三角形と言われるに値するかどうかを、それによってあなたが探知する<explorare>ところの、いわば精神の規則<mentalis regula>のことである。しかしだからといって、そのような三角形が何か実在的なく<realis>ものであり、知性を越えた<praeter intellectum>真なる本性であ

る、と言われるべきではない。この知性のみが、物質的三角形<triangulus materialis>を見て、人間の本性について言われたのと同様に、三角形の本性を形成し、それを共通の本性にしたのである。

ここからまた、次のように見なすべきではない。すなわち、物質的三角形について論証された諸特性がそれら物質的三角形に適合する<convenire>のは、物質的三角形がそれら諸特性を観念的三角形<triangulus idealis>から借りて<mutuari>きたがゆえにである、と見なすべきではない。なぜならむしろ、それら物質的三角形そのものがそれ自身のうちにそれら諸特性をもっているのであって、観念的三角形がそれらの諸特性をもつのは、知性が、物質的三角形を洞見して<inspicere>から、後で論証の際にそれら諸特性を物質的三角形に与え返すために、それら諸特性を観念的三角形に付与するという、その限りのことでしかないからである。

○ 1-4-2 《第五反論》 A.T.VII, 322.07-10

さらにここで、幅のない線<linea>から成り、深さのない面<area>を含み、いかなる部分もない三つの点<punctum>によって限られている、と想定されている、三角形の偽なる<falsus>本性について述べるべきであった。

R 1-4 《第五答弁》 A.T.VII, 380.16-22

三角形や他の任意の幾何学図形の本質がそうであるように、明晰かつ判明に認識された本質については、われわれのうちに在るそれら本質の観念は、個別的なものから取ってこれ<desumi>たのではないことを、あなたが認めるようにすることは私には容易である。というのも、ここでそれらが偽であるとあなたが言うのは、事物の本質についてのあなたの先入見が、それらと適合しないからなのだ。

まず、第五反論者の言う「物質的三角形」であるが、これは、三角の形状をした物体的事物のことであろう。「観念的三角形」が、第三反論者のように三角形の像を意味するのか（○ 1-1）、三角形の本質ないし本性の観念なのかは、判定の難しいところではあるが、「それら諸特性を観念的三角形に付与する」という反論者の言葉を考慮すると、三角形の像を意味すると思われる。そうであれば、観念についてのデカルトの見方からして、「観念的三角形」という表現

をデカルトは認めないであろう。

また、第五反論者は、三角形が「知性を越えた真なる本性である、と言われるべきではない」と主張するが、デカルトは、三角形が真なる本性であるとは言っていない。デカルトは、三角形という図形と、三角形の本質ないし本性とを明確に区別している。さらに、論証される三角形の諸特性は物質的三角形そのもののもつものである、と反論者は主張しているが、デカルトがこの主張自体を否定してはいないことに注意すべきだろう。ただし、三角形の本質の観念については、それが個別的な物質的三角形から取ってこられたものではない、とデカルトは考えている。三角形の本質は神を原因とするものだからである。したがって、「三角形の諸特性は物質的三角形そのもののもつ」と言いうるとしても、それは、そのような諸特性をわれわれの精神がその物質的三角形のうちに見出すべく、神が設定したから、ということになるだろう。

最後に、反論者の「三角形の偽なる本性」であるが、「偽なる」と言われる理由は、「幅のない線から成り、深さのない面を含み、いかなる部分もない三つの点によって限られている」ような物体は実在しないからであろう。デカルトも、そのような物体が実在しないことは認める。また、三角形の本質ないし本性が物体として実在しないことも認める。しかしデカルトにとって、「幅のない線から成り、深さのない面を含み、いかなる部分もない三つの点によって限られている」ことは、三角形の本質に属することであり、この本質は偽ではありえない。

2 第五省察第6段落に関して

M2 《省察本文》 A.T.VII, 64.25-65.06

なおまた、そうした三角形の観念はたぶん感覚器官<organa sensuum>を介して外的な事物から私に到来したのだろう、それというのも、私は三角の形状をもっている物体を時折見たことがあるのだから、と私が言うとしても、何にもならないのである。というのは、私は、かつて感覚<sensus>を介して私のうちに滑り込んできたのではないか、という何らの疑念もありえない他の無数の図形を考え出すことができ、しかもこういう図形について、三角形の場合に劣らず、さまざまな特性を論証することができるからである。たしかにこれらの特性は、私によって明晰に認識される以上、すべて真なるもので

あって、したがって、何ものかであって、純然たる無<merum nihil>ではないのである。というのも、真であるすべてのものが何ものかであることは、明らかであるからであり、それに、私が明晰に認識するものがすべて真であることを、すでに私は詳しく論証しておいたのである。

ここでデカルトは、三角形の観念の原因が外的な事物ではないことの根拠として、外的な事物としては実在しえないような幾何学図形についても、三角形と同様にその特性を論証できる、ということを示している。三角形の観念が三角形の本質に関わるものであって、三角形の像のごときものではないとデカルトが見なしていることは、ここからも明らかであろう。

なお、「純然たる無ではない」と言われるものは、幾何学図形の特性であって、幾何学図形そのものについて言及されているのではない、ということに注意すべきであろう。

O 2-1 《第五反論》 A.T.VII, 321.27-322.03

もしあなたがこれまであらゆる感覚の機能<sensuum functiones>奪われていて、決して物体のさまざまな表面<superficies>や末端<extremum>を、見たこともなく触れたこともなかったとしても、あなたは、三角形やその他の図形の観念をあなたのうちにもつことが、あるいは形造る<efformare>ことができたであろうと思うか。

R 2-1 《第五答弁》 A.T.VII, 381.22-382.24

幾何学者によって考察されるような図形が世界のうちに存し<in mundo dari>うる、ということは疑いを入れぬところではあるとしても、しかし、おそらくいかなる意味でもわれわれの感覚には触れないというほど、それほど微細なものとしてでなければ、それらの図形がわれわれのまわりに存するというのを、私は否定する。というのも、たいていの場合それらの図形は直線から成り立っているが、しかし、実際に<revera>⁶⁾真っ直ぐであるような線のいかなる部分も、われわれの感覚を動かしたことなど決してないからだ。実際、われわれには極めて真っ直ぐに見えた線を拡大鏡でわれわれが吟味してみれば、それらの線がまったく不規則であり、至るところで波状に彎曲していることを、われわれは思い知らされるのだ。したがって、かつて子供の頃に、最初に紙片に描き出されている三角の形状にわれわれが目に向けたとき、

その図形はわれわれに、どういうふうにして真の三角形<verus triangulus>が、幾何学者によって考察されるように概念されるべきかを、教えることができなかったのだ。というのも、その図形のうちには、あたかもメルクリウスの像が荒削りの木塊のうちに含まれているのと同じような仕方では、真の三角形は含まれていなかったからなのだ。しかし、すでに以前にわれわれのうちに真の三角形の観念が在って、そしてそれがわれわれの精神によって、紙片に描かれた三角形のもっと複合的な形状<figura composita>よりもいっそう容易に概念されることができたからこそ、そうした複合的な形状を見たとき、その形状そのものをではなく、むしろ真の三角形を捉え<apprehendere>たのである。……かくして確かに、幾何学的三角形を、われわれの精神がその観念をどこかほかのところから得てきているのではない限りは、紙片に描かれたものから認知することは、われわれにできるわけではないのである。

第五反論者は、「物体のさまざまな表面や末端」を見たり触れたりすることによって、三角形の観念が形成される、と主張している。これに対してデカルトは、それは三角形の観念ではない、と答えている。デカルトによれば、「真の三角形」の観念は「紙片に描き出されている三角の形状」を見る以前に、われわれのうちに在る。この観念によって、われわれは「真の三角形を捉える」のであるが、捉えられるのは、幾何学的三角形という図形そのものではなく、幾何学的三角形の本質であろう。「物体の表面や末端」については、後にさらに論じることにする。

これに対して、ここに引用した答弁の冒頭で述べられている「幾何学者によって考察されるような図形」というのは、数学的に厳密に定義された幾何学図形そのもの、例えば、三本の直線で囲まれた平面図形としての幾何学的三角形そのもの、のことであろう。そういう図形が「世界のうちに存しうる」ということを、デカルトは認めている。この「存しうる」ということの意味についても、「可能的実在<existentia possibilis>」という概念と関連させて、後ほど検討したい。

3 第五省察第8段落に関して

M 3 《省察本文》 A.T.VII, 66.07-15

いっそう入念に注意してみれば、実在が神の本質から分離されえない<non posse separari>のは、三角形の本質から二直角に等しいその三つの角の大きさが分離されえず、山の観念から谷の観念が分離されえないのと同様であることは明瞭である。したがって、実在を欠いている（言い換えれば、或る完全性<perfectio>を欠いている）ような神（言い換えれば、この上なく完全な存在<ens summe perfectum>）を思惟することは、谷を欠いている山を思惟するのと同様、矛盾なのである。

『省察』本文のこの箇所は、いわゆる存在論的証明に属する箇所であって、三角形が主題的に語られているわけではない。しかし、その三つの角の和が二直角に等しいという三角形の特性と、三角形の本質とが分離されえない、というデカルトのここでの言明によって、本稿において用いてきた「三角形の特性はその本質に属する」というような表現の妥当性が、裏付けられたのではないだろうか。

また、この箇所に関して、以下のような反論と答弁が交わされているが、とりわけデカルトの答弁は、本稿の目的にとって、重要であると思われる。

O 3-1 《第五反論》 A.T.VII, 323.08-11

ちょうど神の本質と実在が別々に思惟されうるように、三角形の本質と実在が別々に思惟されても、実際には三角形の本質と実在は分離されえないのだが、たとえそうではあっても、三角形もまた必然的に実在する、ということにはならない。

R 3-1 《第五答弁》 A.T.VII, 383.12-20

「本質と実在とが神において」、三角形におけると同様に、「一方が他方なしに思惟されることができる」ということは真ではない。それというのも、神は神自身の存在である<Deus est suum esse>が、しかし、三角形はそうではないからだ。しかしそれでも私は、必然的実在<existentia necessaria>が神の観念における完全性であるように、可能的実在<existentia possibilis>が三角形の観念における完全性であることを、否認しない。というのは、このことが三角形の観念を、キマイラ——このもののいかなる実在も在りえないと想定

される——の観念よりもいっそうすぐれた<praestans>ものになっているのだから。

三角形の本質と実在とは分離されえないので、三角形は必然的に実在する、などとは言えないように、神の本質と実在とが分離されえないからと言って、神が必然的に実在することにはならない、というのが第五反論者の主張なのであるが、本稿では、三角形に関する部分のみを取りあげた。この反論に対するデカルトの答弁についても、次の発言のみに注目したい。それは、「可能的実在が三角形の観念における完全性である」という発言である。

『省察』本文において、「実在を欠いている」を「或る完全性を欠いている」と言い換えていることから推測できるように、「完全性」は実在に関わる概念である。しかし、答弁におけるデカルトの発言は、三角形の観念は実在することが可能である、という意味ではない。問題になっている実在は、三角形の観念が表現している対象の実在である。すなわち、数学的に厳密に規定された三角形という図形そのものの実在である。デカルトはここで、三角形という幾何学図形は実在することが可能である、と認めているのである。答弁 R 2-1 における「幾何学者によって考察されるような図形が世界のうちに存しうる」という発言も、もちろんこのことを言っているのである⁷⁾。

なお、「可能的実在」と「必然的実在」の区別については、『第一答弁』において、次のように述べられている。

R 3-1-1 《第一答弁》 A.T.VII, 116.20-117.05

可能的実在と必然的実在とが区別されなければならない。そして、なるほど明晰かつ判明に知解されるすべてのものの概念ないし観念のうちには可能的実在が含まれているが、必然的実在は、神の観念のうち以外には、どこにも含まれていない、ということに注意しなければならない。……なるほどわれわれは、[神以外の] その他の事物を、実在するものとしてでなければ決して知解しないとしても、しかしそのことから、それら事物が実在するということは帰結しないのであって、ただ実在しうるということが帰結するにすぎない。というのも、現勢的な実在<actualis existentia>がそれらの事物の他の諸特性に結びついている、ということが必然的である、とはわれわれは知解しないからである。([] 内は筆者による挿入)

4 第六省察第1段落に関して

M 4 《省察本文》 A.T.VII, 71.14-16

そして確かに、私はすでに少なくとも、物質的事物<res materialis>は、純粹数学の対象<purae Matheseos objectum>⁸⁾であるという限りにおいては、実在しうる、ということだけは知っている。なぜならば、私はそれらを明晰かつ判明に知得するからである。

純粹数学の対象が「実在しうる」、ということについては問題はない。すでに見た「可能的実在」のことである。ここで取り上げたいのは、物質的事物が「純粹数学の対象であるという限りにおいて」という文章である。まず注意したいのは、この文章が、「純粹数学の対象は物質的事物である」と言っているわけではない、ということである。幾何学図形は純粹数学の対象ではあろうが、それが物質的事物ではないことは、デカルトの主張するところである。この文章は、「物質的事物が純粹数学の対象として考察されうる限りにおいて」と読むべきではないだろうか。そうだとすると、物質的事物はいかなる意味において「純粹数学の対象」として考察されうるのだろうか。この疑問に対して、次の答弁は一つの解釈の可能性を提示しているように思われる。

O 4-1 《第五反論》 A.T.VII, 328.25-329.05

「物質的事物は、純粹数学の対象であるものとして<ut>、実在しうる」に対しては、私は異論を唱えない。とはいえ、物質的事物は純粹数学の対象ではなくて、複合数学<mixta mathesis>⁹⁾の対象なのであるが。点、線、表面、およびそれらから構成された不可分なもの<indivisibilia>や不可分な状態にあるもの<indivisibiliter se habentia>、これらのような純粹数学の対象は、実際に実在することはできない。

R 4-1 《第五答弁》 A.T.VII, 380.23-381.19

あなたは、「点、線、表面、およびそれらから構成された不可分なものや不可分な状態にあるもの、これらのような純粹数学の対象は、実際に実在することはできない」と言っている。そこから帰結するのは、いかなる三角形も、またおよそ、三角形や他の幾何学図形の本質に属すると知解されるものの中の何ものも、決して実在することはなかったということ、したがってそういった本質は、実在するいかなる事物からも取ってこれれ<desumi>たもの

ではない、ということである。しかし、それら本質が偽である、とあなたは述べる¹⁰⁾。それはすなわち、あなたの意見によれば、あなたが事物の本性を、幾何学的本質がそれには符合し<conformis>ないような、そういうものとして想定しているからである。しかし、幾何学全体が偽であるということもまたあなたが主張するのではないとすれば、あなたは幾何学的本質について多くの真理が論証されることを否定できないのであって、それらの真理は常に同一であるので、不変で永遠であると正当に言われるのである。しかし、あなたが想定している事物の本性にそれらの幾何学的本質がおそらく符合しないということ、同様にまた、それら幾何学的本質が、デモクリトスやエピクロスがアトムから作り上げた事物の本性にもおそらく符合しないということ、こういうことは、幾何学的本質にとっては単に、何ものをも変えない外的な命名<denominatio>にすぎないのである。それにも拘わらず、それら幾何学的本質が、真なる神によって定められた事物の真なる本性に符合する、ということはまったく疑いない。それは、世界のうちに、幅のない長さを、もしくは深さのない幅をもつ実体<substantia>が在るからではなくて、幾何学図形が、実体としてではなく、そのもとに実体が包み囲まれる<containeri>ところの境界<terminus>として考察されているからなのである。

「点、線、表面、およびそれらから構成された不可分なものや不可分な状態にあるもの、これらのような純粋数学の対象は、実際に実在することはできない」という反論者の主張は、デカルトも認めている。ただし、そこから帰結するのは、三角形やその他の幾何学図形そのものは実在しないということ、それら図形の本質に属する特性も実在しないということ、したがって幾何学的本質は実在する事物を原因としてはいない、ということである。しかし、幾何学的本質は、実在する事物の「真なる本性に符合する」とデカルトは言う。どちらも神によって定められたものだからである。それでは、具体的にはどのようにして「符合する」のか。それは、デカルトによれば、実体である物体を包み込む「境界」として、幾何学図形を考察することによってである。逆に言えば、物体ないし物質的事物は、その境界のみが注目されることによって、幾何学図形として、すなわち純粋数学の対象として、考察されうるのである。しかしデカルトは、この境界が幾何学図形そのものであるとは言っていない。「境界として考察する」といいうのは、あくまで、幾何学図形を考察する一つの仕方

すぎないと思われる。

なお、「そのもとに実体が包み込まれるところの境界」については、聖体の秘蹟に関するアルノーの《第四反論》(A.T.VII, 217.15-218.02)に答えた以下の答弁がある。

R 4-1-1 《第四答弁》 A.T.VII, 249.14-17

隠さずに言えば、私は、われわれの感覚がそれによって触発される<affici>ところのものは、感覚される物体の諸次元<dimensiones>それぞれの〔括弧の〕境界であるその表面の他にはまったく何もない、と納得している。(〔内は筆者による挿入〕)

R 4-1-2 《第四答弁》 A.T.VII, 250.27-251.03

最後に注意すべきは、パンの、もしくは葡萄酒の、あるいは他の物体の表面ということによって、ここでは、実体のいかなる部分も、またその物体の量<quantitas>のいかなる部分も、その物体の周囲にある物体のいかなる部分も、けっして知解されているのではなく、ただ単に、「その物体の一つ一つの粒子<particula>と、それら粒子を取り囲んでいる諸物体との間の間隔<medius>として概念され、様態的な存在性<entitas modalis>の他には何もまったくもたない、境界」のみが知解されているだけだ、ということである。

この答弁において、境界ないし表面は「様態的な存在性の他には何もまったくもたない」と言われている。したがって、境界ないし表面は、「実際に実在することはできない」ものであろう。そして幾何学図形も、「実際に実在することはできない」ものであった。しかしだからといって、境界ないし表面こそが、数学的に厳密に定義された幾何学図形そのものなのだ、ということにはならない。それは、すでに見た反論 O 2-1 とそれに対する答弁 R 2-1 から、明らかであろう。

さらに、この第四答弁に関して、以下の反論と答弁がある。

O 4-2 《第六反論》 A.T.VII, 417.13-17

そこにおいて、あるいはそれによって、すべての感覚<sensatio>が生じる、とあなたが言う表面について。表面は、感覚される物体の部分ではないし、また、そういう物体——表面がその物体の何らかの部分あるいは末端であることをあなたは否定している——を取り囲む空気や蒸気の部分でもない、と

ということがどうしてありうるのか、われわれには知解できない。

R 4-2 《第六答弁》A.T.VII, 433.11-434.06

われわれの感覚<sensus>がそれによって触発されると私が考えるところの表面というものを、私は、すべての数学者あるいは哲学者によって概念されるのが常であるもの（あるいは少なくとも概念されているはずのもの）、すなわち、彼らが物体から区別して、深さをいっさい欠いていると想定しているもの、そういうものと別様には概念していない。しかし数学者たちにおいては、表面という名辞は二通りの仕方 で用いられている。一つは物体として。すなわち、その物体のただ長さ と幅のみに注意が向けられ、何らかの深さをもつことが否定され<negari>てはいないとしても、いかなる深さとともに観られる<spectari>こともない、そういう物体として。一つは、単に物体の様態<modus>として。すなわち、一切の深さがそれに対して拒否され<denegari>ている、そういう場合の様態として。そしてそれゆえに私は、曖昧さを避けるために、様態にすぎないのであるから物体の部分ではありえないところの表面について私は語る、と述べたのである。というのは、物体は実体であるが、様態は実体の部分ではありえないからである。しかし私は、この表面が物体の端<extremitas>であることを否定はしなかった。それどころか反対に、二つの物体——それらの端が一緒になっている二つの物体——が接していると言われる、その意味においては、表面は、包み込まれる物体の端とも、包み込む物体の端とも、きわめて適切に呼ばれうるのである。というのも、もちろん、二つの物体が互いに触れ合っている場合、両者の端は一つの同じものであり、それはどちらの物体の部分でもなく、両者の同じ様態であって、この端はまた、それら二つの物体が取り除かれたとしても、それと正確に同じ大きさ と形状をもった他の物体がその場所に代わって入りさえすれば、存続することができるからである。

デカルトによれば、数学者は「表面」を「物体」と見なす場合と、「物体の様態」と見なす場合があるという。そしてデカルト自身は「表面」という言葉を、後者の意味で用いたと述べている。いずれにしろ、「物体」も「物体の様態」も、厳密な意味での幾何学図形そのものではない、ということになるであろう。

5 第六省察第3段落に関して

M 5 《省察本文》 A.T.VII, 73.15-20

知解する際には、精神は、自己を自己自身へと或る仕方であつて <quodammodo> 振り向けて <convertere>、精神そのもののうちに内在している <in esse> 観念のうちの或るものを注視するのであるが、想像する際にはしかし、精神は、自己を物体へと振り向けて、その物体において、自己によって知解された観念か、感覚によって知得された観念か、に符合する何ものかを、見つめる <intueri>。

知解と想像との違いについて述べられている箇所であるが、注目したいのは、後半の想像に関する部分である。そこでは、精神が「自己を物体へと振り向けて」と言われているが、この「物体」が、『ピュルマンとの対話』で説明されているような¹¹⁾ 身体の或る部位であるならば、ここにこそ、三角形の像が形成されるはずであろう。そしてその像において、三角形の本質に符合するものを「見つめる」のである。

O 5-1 《第五反論》 A.T.VII, 331.23-332.02

「精神は想像するに際しては物体へと向かい、知解するに際しては自己自身へ、あるいは精神が自己のうちにもつところの観念へと自らを振り向ける」と、あなたは付け加えている。しかし、もし精神が同時に、何らかの物體的なものへ、あるいは物體的な観念 <idea corporea> によって表されるもの <repraesentatum> へと自らを振り向けるのでなければ、精神は自己自身へも、あるいはいかなる観念へも自らを振り向けることができないとすれば、どうしてそんなふうに見えるのか。というのも実は、三角形、五角形、千角形、万角形や、その他の図形は、あるいはそれらの図形の観念は、まったく物體的なのである。そして精神は、知解する際、物體的な観念として、あるいは物體的な観念に類したものとしてみれば、それらの図形の観念に注意を向けることはできない。

R 5-1 《第五答弁》 A.T.VII, 385.07-12

知解においては、精神はただ自己のみの用いるが、想像においては、精神は物體的な形相 <forma corporea> を観想する <contemplari> のである。そして、たとえ幾何学図形がおよそ物體的であるとしても、しかしそれだからといっ

て、幾何学図形がそれによって知解されるところの観念は、その観念が想像力<imagination>の支配下になくるときには、物的なものと考えられるべきではない。

第五反論者は、幾何学図形の観念が「物的」であると言う。反論のこの箇所だけでは、反論者がどのような意味で「物的」という語を用いているのかわからない。しかしもし、身体のある部位に形成される像が観念と見なされ、この像の物的性のことが言われているのだとすれば、すでに見たように、デカルトがそのような物的性を観念に認めるはずはない。

しかし、この反論に対するデカルトの答弁は、いささか簡潔に過ぎ、誤解を招きやすいように思われる。まず、「たとえば幾何学図形がおおよそ物的であるとしても」と述べられているが、幾何学図形そのものが物体であるというわけではないであろう。この発言はむしろ、「数学者は表面を物体と見なす場合がある」という R 4-2 の発言に関係づけるべきだと思われる。

また、「その観念が想像力の支配下になくるときには」という但し書きについて言えば、これは決して、「想像力の支配下にあるときには」幾何学図形の観念は物的である、という意味ではない。「その観念が想像力の支配下にある」というのは、例えば、三角形を想像する際に、精神が三角形の像へと自己を振り向けて、三角形の観念によって知解された特性と「符合する」ものを見て取る、という事態を指すものと思われる。

6 第六省察第 9 段落に関して

M 6 《省察本文》 A.T.VII, 78.02-78.20

私は、明晰かつ判明に私が知解するものはすべて、私が知解するとおりのものとして神によって作られることを知っているのであるから、一つの事物が他の事物とは別個のものであるということを私が確信するためには、一つの事物を他の事物なしに明晰かつ判明に私は知解できる、ということだけで十分である。なぜなら、それらは少なくとも神によって別々に措定されるからである。……一方で、私が思惟する事物でしかなく延長する事物ではないという限りにおいて、私は私自身の明晰かつ判明な観念をもっており、他方では、身体が延長する事物でしかなく思惟する事物ではないという限りにおいて、私は身体の判明な観念をもっているのだから、私が私の身体から実際に

区別されたものであって、身体なしに実在しうることは、確実である。

この段落は、次の段落で完成する物的事物の実在証明に向けて、精神と身体の実在的区別〈*realis distinctio*〉について述べられている箇所である。ここでは、幾何学図形については何も述べられていない。しかしこの実在的区別に関して、三角形を例にしたアルノーの反論が寄せられている。この反論は冗長で込み入っているもので、以下に要約して紹介する。

O 6-1 《第四反論》A.T.VII, 201.24-203.05 (要約)

第六省察のこの箇所に基づいて、私の本質から身体を排除することが確実にできると言えるか。例えば、次のような人を想定してみよう。すなわち、その人は、半円にその直径を底辺として内接する三角形が、直角三角形であることを明晰かつ判明に知得する。しかし、その三角形の底辺上の正方形が他の二辺上の正方形の和に等しいことは知らない。そのために、「底辺上の正方形が他の二辺上の正方形の和に等しいということは、その直角三角形の本質に属する」とは考えていない。つまりこの人は、「その三角形の底辺上の正方形が他の二辺上の正方形の和に等しい」ということを知解することなく、「その三角形が直角三角形である」ことを明晰かつ判明に知得しているのである。したがってこの人にとっては、デカルトのこの箇所における言明によれば、その底辺上の正方形が他の二辺上の正方形の和に等しくない直角三角形が、少なくとも神によって作られうる、ということになる。

この人は、直角三角形の性質について明晰かつ判明に知得していない、と言うほかない。ところで、私は私の精神について、この人が直角三角形の性質について知得しているよりも、いっそう明晰に知得していると言えるだろうか。私が、「私の本性には、私が思惟する事物であるということ以外に属していない」と思うのは、彼が「直角三角形の本性には、その底辺上の正方形が他の二辺上の正方形の和に等しいということが属している」と思わないのと同様に、誤ってはいないのか。

R 6-1 《第四答弁》A.T.VII, 224.10-18

おそらく三角形というものは、具体的には〈*in concreto*〉三角の形状をもつ実体として、解される〈*sumi*〉ことができるとしても、底辺上の正方形が他の二辺上の正方形の和に等しいという特性が実体でない、ということは確かだ

ある。したがって、これら二つの各々<unumquodque ex his duobus>は、「精神と身体」が十全的な事物<res completa>として知解されるのと同じようには、十全的な事物として知解されえない。しかも、私が「一つの事物（つまり十全的な事物）を他の事物なしに知解することができるということをもってすればそれで十分である、云々」と述べたその意味では、その各々は事物とは決して呼ばれえない。

「その底边上の正方形が他の二边上の正方形の和に等しくない直角三角形が、少なくとも神によって作られうる」という反論における議論については、答弁 R 1-2、R 1-2-1、R 1-3 などを見る限り、デカルトはこれを肯定せざるをえないのではないと思われる¹²⁾。しかし、反論の主旨はこの点にあるのではない。したがってデカルトも、これについては肯定も否定もしていない。

また、「おそらく三角形というものは、具体的には三角の形状をもつ実体として、解されることができるとしても」という発言については、答弁 R 5-1 における「たとえ幾何学図形がおよそ物的であるとしても」という発言と同様に解釈すべきだろう。

本稿にとって重要なのは、「これら二つの各々は」と述べられていることから明らかのように、三角形の特性も三角形そのものも、精神や身体（物体）のような「十全的な事物」ではない、というデカルトの発言である。この答弁を読む限りでは、実体として実在する事物ではないものを、「十全的な事物ではない」と言い換えているように思えるが、「十全的な事物」という言葉は『省察』本文には一度も登場しない。そこで、この言葉の定義を与えている《第四答弁》の箇所を参照しよう。

R 6-1-1 《第四答弁》 A.T.VII, 222.01-09

「十全的な事物」ということによって私が知解しているのは、この事物は実体であると私がそれらから認知するところの形相ないし属性<attributum>をまとっている<indutus>実体、こういう実体以外の何ものでもない。

というのも、他の箇所で指摘されているように、われわれは実体を直接的に認識するのではなく、ただ或る形相ないし属性をわれわれが知得することからのみ認識するのであるが、かかる形相ないし属性は、それらが実在するためには、何らかの事物に内在していなければならないのだから、それらが内在しているその事物を、われわれは「実体」と呼んでいるからなの

である。

「属性」を「特性」と読み換えてもよいだろう¹³⁾。そうすると、この答弁でのデカルトの主張によれば、三角形の特性、例えば「その三つの角の和は直角に等しい」という特性は、三角形が実体であるとわれわれに認知させるような特性ではない、ということになる。なぜなら、答弁 R 6-1 によれば、三角形は「十全的な事物」ではないからである。したがってまた、三角形の特性は、何らかの実体に内在することによって実在しているものでもない。なぜなら、三角形を「事物」と呼ぶことができるとしても、それは、三角形が「十全的な事物」であるという意味ではないからである。

O 6-2 《第四反論》 A.T.VII, 203.27-204.09

ちょうど幾何学者たちが、幅のない長さというのはなく、深さのない幅もないのにも拘わらず、線を幅のない長さとして、また表面を深さのない長さと同様として、概念しているのと同様に、おそらく人は、次のように疑うことができるだろう。すなわち、思惟する事物はすべて延長する事物でもあるのであって、ただその思惟する事物には、形状を有しうる<figurabilis>とか運動しうる<mobilis>等々のような、他の延長する事物と共通するあり方<affectio>に加えて、特有の思惟する能力<virtus>が内在しているのではないか、と。それゆえに、実際には思惟する事物には物体のあり方が適合するにも拘わらず、ただこの能力のためにこの事物は、知性の抽象<abstractio intellectus>によって、思惟する事物として捉えられうる、ということになるのではないか、と。それはちょうど、実際にはすべての量には、長さとともに幅と深さも適合するにも拘わらず、ただ長さだけでもって概念されうる、というのと同様ではないのか、と。

R 6-2 《第四答弁》 A.T.VII, 228.16-19

精神の概念は、表面あるいは線の概念とは甚だしく異なっているのであって、表面あるいは線は、長さと同様に、深さもそれらに帰せられるのでなければ、そのような十全的な事物として知解されることはできない。

この反論と答弁の主題は「思惟する事物」であって、幾何学図形ではない。しかし、ここで注目したいのは、「幾何学者たちが、幅のない長さというのはなく、深さのない幅もないのにもかかわらず、線を幅のない長さとして、また

表面を深さのない長さとして、概念している」のは、「知性の抽象」による、という第四反論者の主張である。デカルトはこの主張を認めているのだろうか。認めているとすれば、「知性の抽象」とは、デカルトにとってどのようなものなのだろうか。

この答弁においては、デカルトは「知性の抽象」には何も言及せず、表面あるいは線は十全的な事物ではない、と答えているだけであるが、おそらく第四反論者のこの主張を認めていると思われる。というのも、『省察』の出版とほぼ重なる時期にジビュ神父に宛てた書簡¹⁴⁾においてデカルトは、「私が一つの図形を考察し、その図形がその形状であるところの実体にも延長にも思惟を向けないときは、私は精神の抽象 < abstraction d'esprit > を行なっているのである」と述べているからである。

それでは、知性ないし精神の抽象は、幾何学図形の考察に、例えば三角形の考察に、どのように関わっているのだろうか。まず、精神の抽象は、三角形の観念の形成に関わるものではない。答弁 R 2-1 で述べられていたように、物体の表面や端、あるいは紙片に描かれた三角形を見る以前に、「われわれのうちに真の三角形の観念が在る」からである。また、精神の抽象は、三角形の本質に関わるものでもない。すでに見た答弁 R 1-2-1 によれば、三角形の本質に属する特性は、神がそれを欲したがゆえに真なのであって、そこに抽象という働きが関与する余地はないからである。さらに、抽象という働きは、三角形の特性の把握に関わるものでもない。省察本文 M 1、また答弁 R 4-1 からも明らかのように、三角形の特性は、抽象という働きによってではなく、論証という働きによって把握されるものだからである。

実を言えば、いま指摘した答弁 R 4-1 のなかに、この「精神の抽象」の働きが別の形で表現されていると思われる発言がある。それは、「幾何学図形が、実体としてではなく、そのもとに実体が包み囲まれるところの境界として考察されている」という発言である。幾何学図形がこのような仕方では考察されることこそが、「精神の抽象」の具体的な働き方であろう。そうだとすると、「精神の抽象」とは要するに、幾何学図形そのものを物体からいわば抽出す働きのことではないだろうか¹⁵⁾。もちろん、すでに述べたように、物体の表面や端それ自体が、厳密な意味での幾何学図形であるというわけではない。例えば三角形の場合、物体の表面や端は、三角形の本質を担う基体としての、三角形という図形そのものを考察するための、いわば素材に過ぎない。抽象は、実在しない

幾何学図形そのものを把握するために働くのである。答弁 R 6-1 で述べられていたように、「おそらく三角形というものは、具体的には三角の形状をもつ実体として、解されることができる」のも、この「精神の抽象」という働きがあればこそだと思われる。

以上で、『省察』本文の六つの箇所とそれに関連した《反論と答弁》の検討を終えるが、最後に、幾何学図形の存在論的身分についての見通しを、本稿の冒頭で提示した三つの可能性——私の思惟のうちに在るか、神のうちに在るか、物的事物のうちに在るか——に関連させて述べておきたい。

これまでの検討から明らかなように、デカルトが幾何学図形の存在をどのように考えていたかを論ずるには、幾何学図形の本質と幾何学図形そのものとはを区別して論じた方が、見通しを立てやすいだろう。

そこでまず、幾何学図形の本質について言えば、すでに見てきたように、三角形の本質は実体として実在するものではない。このことは、デカルトが本質と実在を区別している (R 1-1) こと、「三角形や他の幾何学図形の本質に属すると知解されるもののうちの何ものも、決して実在することはなかった」と述べている (R 4-1) ことなどから、明らかであろう。

しかしそれでも、幾何学図形の本質は「何ものかであって、純然たる無ではない」とデカルトは『省察』本文で主張している (M 2)。では、どのようなものとして在るのか。先に述べた三つの可能性に関連させて言えば、まず、幾何学図形の観念が私の思惟のうちに在り (R 2-1)、それによってその図形の本質を私が知解することができるという意味で、幾何学図形の本質は「私の思惟のうちに在る」と言えるのではないだろうか。

また、答弁 R 4-1 に述べられているように、幾何学図形の本質は「真なる神によって定められた事物の真なる本性に符合する」のであるから、われわれは、物的事物のうちに幾何学図形の諸特性を見て取ることができる。この意味では、幾何学図形の本質は「物的事物のうちに在る」と言うこともできるだろう。ただし、答弁 R 6-1 および R 6-1-1 から明らかなように、幾何学図形の本質は、物体という実体に内在することによって実在しているわけではない。

さらに、答弁 R 1-4 を検討した際に述べたように、物的事物のうちに幾何学図形の諸特性を見て取ることができるのは、そのように神が設定したからである。しかも、三角形の本質の原因は神なのである (R 1-2/R 1-2-1/R 1-3)。

この意味では、三角形の本質は「神のうちに在る」ということになるだろう。

それでは、幾何学図形そのものについてはどうであろうか。デカルトにとって、実体として実在するのは、神を別にすれば、精神と物体の二つである。幾何学図形そのものが精神でないことは明らかであるから、幾何学図形そのものがもし実体として実在するならば、それは物体的事物としてであろう。しかしすでに見てきたように (M1/R2-1/R4-1)、幾何学図形が物体的事物として実在することを、デカルトは明確に否定している。

幾何学図形そのものは、実体として実在するものではない。しかし「十全的な事物」(R6-1)としてではなくとも、幾何学図形は、何ものかとしてどこかに在るのだろうか。

幾何学図形の観念として、あるいは像として、私の思惟のうちに在るのだろうか。おそらくその可能性はない。すでに検討したように (M2/R1-4/R2-1)、幾何学図形の観念は、幾何学図形の本質の観念であって、幾何学図形そのものの観念ではないからである。また、像について言えば、それが脳内の或る部位に描かれたものである限り¹⁶⁾、像は物体的事物であって、デカルトがこれを幾何学図形そのものと認めることはありえない。幾何学図形が物体的事物として実在することになるからである。

それならば、幾何学図形そのものは、境界ないし表面として (R4-1/R4-2)、様態的な存在性のみをもちながら (R4-1-2)、物体的事物のうちに在るのだろうか。しかし、答弁 R6-2 を検討した際に見たように、幾何学図形は、境界ないし表面をいわば素材として、精神の抽象によって把握されるものである。物体の境界や表面は、幾何学図形そのものではない。

結局、幾何学図形そのものは、「世界のうちに存しうる」(R2-1)ものとして、答弁 R3-1 の言葉を用いれば「可能的実在」として、その本質をわれわれが知解しうるもの、という存在論的身分しかもたないのである¹⁷⁾。

ただし、神はそれを「現勢的な実在」(R3-1-1)にすることができるという意味では、幾何学図形は神のうちに在る、と言うことができるかもしれない。もちろん、「神のうちなる可能的実在」については、さらに解明しなければならぬだろう。今後の課題としたい。

註

デカルトの著作および書簡からの引用は、*Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, nouvelle présentation, 11 vols., Vrin, 1973-78. に基づいている。

『省察』本文と《反論と答弁》の引用に当たっては、該当する巻・ページ・行を、例えば A.T.VII, 25.03-04 のように表記した。上記全集版の第7巻25ページ3行目から4行目、という意味である。ただし、デカルトの他の著作に関しては、行の表記を省略した。なお、『省察』本文における段落の数え方もこの全集版に準拠している。

『省察』本文と《反論と答弁》のフランス語訳は、《第五反論》および《第五答弁》以外は上記全集版第9巻第1分冊を用いたが、《第五反論》および《第五答弁》は、F. Alquié, *Œuvres philosophiques de Descartes*, tome II, Garnier, 1967. を用いた。フランス語訳をMMFと略記するが、該当ページを指す際には、前者の場合はA.T.IX-1, 123、後者の場合はF.A.II, 789のように表記する。英語訳は、*The Philosophical Writings of Descartes*, volume II, trans. by J. Cottingham, R. Stoothoff and D. Murdoch, Cambridge U. P., 1984. を用いた。CSMと略記する。日本語訳は、増補版『デカルト著作集』全4巻(所雄章他訳、白水社、1993年)を参照した。本稿における『省察』本文からの引用の日本語訳は、概ねこの『著作集』の第2巻に従っているが、所雄章『デカルト『省察』訳解』(岩波書店、2004年)も参照し、変更を加えた箇所も多い。また、《反論と答弁》およびその他の著作に関しては、『著作集』の訳語を参考にして、概ね筆者自身による訳文に改めた。

なお、『ビュルマンとの対話』からの引用には、上記全集版第5巻のほかに、J-M. Beyssade, *Descartes L'entretien avec Burman*, PUF, 1981. も参照した。JMBと略記する。

- 1) 「形相的」と「優勝的」については、《神の實在と靈魂の身体からの区別とを証明する、幾何学的な様式で配列された諸根拠》——以下《諸根拠》と略記する——の定義IVで、次のように定義されている。「或るものが、観念の対象のうちに、それをわれわれが知得するとおりのものとして在るときは、そのものは観念の対象のうちに在ると言われる。また、そのものが、われわれが知得するとおりのものとして在るのではないが、そのようなものの役割を代行する<vicem supplere>ことができるほど大きなものとして在るときには、そのものは優勝的に観念の対象のうちに在ると言われる。」(A.T.VII, 161.10-13)
- 2) 拙稿「デカルトの三角形——《純粹数学の対象》についての一考察」(『彦根論叢』滋賀大学経済学会編 第366号 2007年 23-39ページ)を参照。
- 3) この一文に関して、Alquiéは次のような註を付している。「これは、存在論的証明に反対する者たちによる、いつも変わらぬ議論である。彼らによれば、まず實在するものとして指定されたもの、こういうものについてしか推論はできないのである。デカルトにとって、また真理が

数学的なタイプのものだとする人々にとっては、本質に関わる真理があるのであって、それらの真理は、事実上のどんな実在からも独立である。以下の反論全体においてホッブズは、数学的な本質——その諸特性はアプリオリに演繹されることができる——と、経験から抽象された一般的観念とを、誤って同一視している。(かくして、三角形の観念と人間の観念とは、彼にとっては同じ本性もつと思われるのである)」(F.A.II, 627, n.1)

- 4) 後出 R 6-1《第四答弁》参照。
- 5) そこにおいて像が形成されるところの、脳内の或る部位。『規則論』では、次のように説明されている。「この表像は、身体の実際の部分であって、相当の大きさを有しているので、そのさまざまな諸部分は、相互に区別されたかなり多くの形を受容することができるし、また、それらの形をかなり長く保持することを常とする。」(A.T.X, 414)

Cf. É. Gilson, *Index Scolastico-Cartésien*, 2e édition, 1979, p.138.

- 6) MMF : véritablement (F.A.II, 829) / CSM : really (CSM, 262)

このほかの箇所においても、MMF は概ね *revera* を véritablement と訳し、CSM は really と訳している。また、*revera* とほぼ同義だと思われる *reipsa* に対しては、MMF は概ね *en effet* と訳し、CSM は *in reality* と訳しているが、本稿で後に取り上げる O 6-2 では、両語とも、MMF は *en effet* と訳し、CSM は *in reality* と訳している。本稿においては、両語とも「実際に」ないし「実際には」と訳した。

所雄章『デカルト『省察』訳解』56 ページ (3) を参照。

- 7) 『ピュルマンとの対話』においてデカルトは、数学の対象について、次のように述べている。「数学はその対象を、ただそれが可能であり、空間のうちになるほど現勢的に実在してはいない <actu non existit> が、それでも実在しうる <existere potest> という限りで、考察する。」(A.T.V, 160/JMB, 72-74)
- 8) MMF では「幾何学の論証の対象 *objet des démonstrations de Géométrie*」(A.T.IX-1, 58)
CSM では「純粋数学の主題 *subject-matter of pure mathematics*」(CSM, 50)
- 9) MMF では「複合数学 *mathématiques composées*」(F.A.II, 768)
CSM では「応用数学 *applied mathematics*」(CSM, 228)
- 10) 前出 O 1-4-2《第五反論》参照。
- 11) 『ピュルマンとの対話』では、以下のように述べられている。「精神は容易に三本の線を脳のなかに形成し、それらを描き出す <depingere> ことができるので、それらの線を容易に洞見することができ、こうして三角形を想像することができるのである。」(A.T.V, 162/JMB, 84-85)
- 12) 《第六省察》の第 1 段落における次の言葉も参照。「そのものが私によって判明に知得されるのは矛盾である <repugnare> ということ、このことの故にでないならば、何ものも神によって作

られえないということは決してない。」(A.T.VII, 71.18-20)

この言葉が意味しているのは、「もし神によって作られえないものがあれば、それを私が判明に知得するのは矛盾である」ということであって、「矛盾であることを私が判明に知得するものを、神は作ることができない」ということではない。

- 13) 《諸根拠》の定義Vには、「特性、もしくは性質、もしくは属性<proprietas, sive qualitas, sive attributum>」(A.T.VII, 161.16)と述べられている。
- 14) Lettre au P. Gibieuf, 19 janvier 1642. (A.T.III, 475)
- 15) 厳密に言えば、ここには、松果腺のうちに形成される像が介入してくるが、これについては、
拙稿(上掲論文)を参照して頂きたい。
- 16) 前註5) 参照。
- 17) 村上勝三『数学あるいは存在の重み』(知泉書館、2005年)参照。

この書の第I部第二章「不変にして永遠なる本質」において著者は、「デカルトの言うところを捉えようとする場合には、「実在すること」とは異なる存在領域を確保せねばならない」(54ページ)と述べている。